



第3版の刊行にあたって

この度、前回の改訂から10年を経過し県内の野生動植物の生息状況について新たな知見が蓄積されてきたことから、その知見を多くの方々と共有するため、「レッドデータブックとっとり」を改訂・発行することといたしました。本書の発行にあたり御尽力をいただきました「レッドデータブックとっとり改訂検討会」委員の皆様や多くの専門家、研究者の方々に厚くお礼申し上げます。

地球上には約175万種の動物や植物が生息・生育していることが確認されていますが、それら野生生物のなかには、開発や里地里山の手入れ不足による生息・生育環境の減少や乱獲などにより数を減らし、絶滅の危機に瀕している種もあります。さらに、今後の地球温暖化の進行による気候や環境の変化は、生物多様性に大きな影響を与える恐れがあります。

このような生物多様性の危機を回避するため、昨年(2022年)12月にカナダのモントリオールで開催された生物多様性条約第15回締約国会議(COP15)において、2020年以降の新たな生物多様性の世界目標である「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択され、2030年までに地球上の陸域、海洋・沿岸域、内陸水域の30%を保護することなど具体的な目標が設定されました。

鳥取県においても国内外の状況と同様に、近年、地球規模での気候変動、里地里山の荒廃、ニホンジカの食害拡大等により、絶滅の危機に瀕するケースも見られ、生物多様性が脅かされつつあります。このため、鳥取県では令和2年3月に県内における生物の多様性の保全及び持続可能な利用に関する基本的な戦略である「鳥取県生物多様性地域戦略」を策定し、令和2年10月に「とっとり生物多様性推進センター」を設立し、県民、事業者、専門家など様々な主体と協働・連携して、希少野生動植物の保護活動や開発事業における生物多様性保全等を積極的に展開しています。

こうした県民の参画を得て鳥取県一丸となった活動が実を結び、最近ではオキナグサなど生育状況を維持・好転させ、絶滅の危機を脱することができた事例もでてきました。鳥取県の生物多様性保全に向け、今後とも御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

本書が、多くの県民、研究者の皆様、更に次世代を担う子どもたちの野生生物への関心や自然保護に対する理解を深めるため広く活用されれば幸いです。

結びに、自然の恵みあふれる鳥取県において多様な生物が末永く栄えゆくことを願いますとともに、県民の皆様の御多幸と御健勝をお祈り申し上げます。

令和5年3月

鳥取県知事 平井 伸治

目次 Contents

I章 はじめに	4
II章 生物多様性保全とレッドデータブック	5
III章 改訂の概要	7
IV章 選定結果	12
V章 選定種の解説	25
1. 哺乳類	26
2. 鳥類	37
3. 両生類・爬虫類	69
4. 淡水魚類	77
5. 昆虫類	87
6. クモガタ類・多足類・陸生甲殻類	172
7. 陸産・淡水産貝類	185
8. その他の無脊椎動物	204
9. 菌類	207
10. 地衣類	212
11. 車軸藻類	216
12. コケ植物	222
13. 維管束植物	231
用語説明	404
和名索引	408

1章 はじめに

Introduction

このたび、多くの方々のご協力により「レッドデータブックとっとり第3版 2022」をお届けできることになりました。鳥取県域に生息・生育する絶滅のおそれのある野生動植物を解説する「レッドデータブックとっとり（動物編、植物編）」が初めて発行されたのは2002年のことでした。その後の変化や生物調査の進展に基づいて不断の検討が続けられ、2012年には各分類群を統合して一冊にまとめた「レッドデータブックとっとり改訂版 2022」が発行されました。そして前版から10年を経て、再び全面改訂されたのが本書です。

レッドデータブックとっとり第3版の改訂作業はちょうど新型コロナウイルスのまん延時期にあたり、移動をともなう調査や対面での検討は大幅に縮小せざるを得ませんでした。特に県外の専門家に依頼した現地調査は実現しなかったものが多く、分類群によっては改訂作業に大きな影響を与えました。このような困難を乗り越え、一層充実した第3版 2022の発行にたどりついたことにほっとしています。改訂に関わっていただいた全ての方々には深く感謝申し上げます。

第3版 2022の発行にあたり、レッドデータブックととりが果たしてきた役割と課題について考えてみました。都道府県版のレッドデータブックは、その地域において保全活動等を行う際の情報源として活用されることが第一の役割と思います。その最もわかりやすい例は、道路建設や河川改修、発電施設など開発規模の大きな事業にともなう環境影響評価（環境アセスメント）の場面です。環境アセスメントでは事業の検討段階で環境保全のために必要な配慮について検討が行われます。既存の調査報告などに基づく検討の中で、生物に関しては事業実施地域とその周囲に生息・生育する可能性のある絶滅危惧種や重要種のリストアップに、このレッドデータブックが重要な役割を果たしています。続いて現地で生物調査がおこなわれ、当該地域内での種の生息・生育状況が明らかにされるとともに、事業がレッドデータブック掲載種の生息・生育に与える影響とその軽減・回避策が検討されます。国内では、生物多様性基本法の公布（2008年）や生物多様性条約第10回締約国会議（2010年、名古屋）の開催を経て「生物多様性の主流化」に向けた活動が活発化し、国連持続可能な開発目標（SDGs, 2015年）の採択とその認知度向上も後押しとなって、絶滅危惧種の保護や生物多様性維持の重要性が広く社会に浸透してきています。絶滅のおそれのある野生動植物や重要種がみつければ、事業の中で影響の軽減・回避や保全策を講じ、事後のモニタリングまで行う流れは確かなものになってきました。レッドデータブックがもつ重要性は増しており、今回の改訂でもできるだけ多くの情報を集めて慎重な検討が行われました。

生物多様性の維持にむけて、絶滅のおそれが高く特に保護が必要な生きものに対しては積極的な保護活動が必要

です。鳥取県では2002年にレッドデータブックととりを作成したおりに、「鳥取県希少野生動植物の保護に関する条例」を制定し、レッドデータブックの評価を基盤にして動物8種、植物33種が鳥取県特定希少野生動植物種に指定されました。指定種はその捕獲・採取が禁止され、保護管理計画が立てられます。種の指定だけにとどまらず、予算措置を講じて継続的に保護活動をおこなうこの取り組みは先進的で、地域の生物多様性全般への関心を高める効果もあったものと思います。このたび、レッドデータブックとっとり第3版 2022の内容もふまえてこれまでの成果が検証され、指定種の見直しが行われました。レッドデータブックは希少種の保護管理とつながっています。

レッドデータブックの発行そのものも、地域のみなさんの野生動植物への関心を高めることを意図しています。レッドデータブックととりは絶滅のおそれのある野生動植物に興味を持ってもらいやすいよう、今回も全掲載種の写真を掲載しています。折しも鳥取県では2020年春に「鳥取県生物多様性地域戦略」が公表されました。レッドデータブックは、生物多様性への興味関心を高めるとともに戦略を裏付ける基盤資料として、生物多様性地域戦略の推進に重要な役割を果たします。

レッドデータブックととりには課題もあります。改訂のたびにできる限りの努力はしているものの、カテゴリー評価の精度を向上させ、種の解説内容をより充実させていく必要を感じます。そのためには生息・生育情報の充実、つまりそれを支える調査者の厚みが重要です。しかし現実には高齢化や現役世代の多忙化などにより調査者は減っており、県内に詳しい方がおられない分類群が増えています。近県の方にもお願いするにも程度が異なるだけで事情は変わらず、今後ますます調査不足の問題が深刻になっていくことが懸念されます。そんな中で今回のレッドデータブック改訂では裾野を広げ次回改訂も視野にいれてなるべく新しい方々にも調査・執筆にかかわっていただくよう心がけました。若い世代の執筆者が加わった点は明るい展望です。社会における生物多様性への関心の高まりを調査者の養成へとつなげ、地域生物相の実態解明をますますすすめていかななくてはなりません。

レッドデータブックととりは、多数の調査者・執筆者の生きものを思いやる気持ちを集めて編集されています。読者のみなさまには、個々の写真や解説文から関係者の努力や苦勞も感じ取っていただけたら幸いです。こうして完成した「レッドデータブックとっとり第3版 2022」が初版、改訂版と同様に、鳥取県の野生動植物と生物多様性の保全のためのさまざまな活動・取り組みに、大いに活用されることを期待しています。

（著者を代表して 永松大）

II章 生物多様性保全とレッドデータブック

Conservation of Biodiversity and Red Data Book

1. 生物多様性保全とレッドデータブック

レッドデータブックは、絶滅のおそれのある野生動植物をリストアップして、その生息・生育状況等をまとめた報告書のことであり、生物多様性の保全を図っていく上で重要な役割を担っている。

その起源は、1966（昭和41）年に国際自然保護連合（IUCN）が発行した哺乳類と鳥類について世界的な規模で絶滅のおそれのある種をリストアップした報告書で、その表紙が赤信号を寓意させた赤色であったことから、以後このような書籍は「レッドデータブック」、絶滅危惧種のリストは「レッドリスト」とよばれるようになった。このIUCN版のレッドデータブック（あるいはレッドリスト）は、以後改訂が続けられ、国際的な野生生物の保護を取り決めたワシントン条約をはじめ、野生生物関連の国際条約や協定、あるいは各国の保護施策の基礎資料として広く活用されている。

日本では、1989（平成元）年に（財）日本自然保護協会と（財）世界自然保護基金日本委員会（WWF ジャパン）により「我が国における保護上重要な植物種の現状」が刊行され、1991（平成3）年には環境庁（現環境省）により「日本の絶滅のおそれのある野生生物」として脊椎動物編と無脊椎動物編が刊行された。これらが我が国における最初の国レベルのレッドデータブックである。

野生動植物の生息・生育状況は常に変化しており、その評価は定期的に見直すことが必要である。1994（平成6）年、国際自然保護連合（IUCN）は定性・定量的な評価基準を用いたレッドリストカテゴリーを採用し、リストの見直しを行った。これを受けて環境省においても定性・定量的要件を組み合わせたカテゴリーを策定し、リストの見直しやレッドデータブックの改訂・発刊が進められた。環境省版のレッドリストは2020（令和2）年公開のレッドリスト2020が最新であり、これは1991（平成3）年公開の初版に、随時必要な見直しが行われたものである。

生物多様性に関する国際的な動きとして1992（平成4）年に生物多様性条約（生物の多様性に関する条約（Convention on Biological Diversity, CBD））が採択され、日本は1993（平成5）年に締約国になっている。条約は生物多様性の保全や持続可能な利用等を目的としており、締約国会議が継続的に開催され、2010（平成22）年開催の生物多様性条約第10回締結国会議（CBD・COP10）では愛知目標が採択された。この目標では2050年に「自然と共生する世界」を達成するために2020年までに達成する目標が定められた。残念ながら愛知目標は目標を達成した項目はない結果となったが、次期愛知目標が2021年からCBD・COP15で協議されている。目標年は2030年であり、後述のSDGsと整合性をとるように組み立てが行われ

ており、目標として「30 by 30（サーティーン・バイ・サーティーン）」についても検討されている。これは2030年までに地球の陸と海の30%以上を自然環境エリアとして保全することを目標とするもので、日本では自然環境保護エリアが、陸で20.5%、海では13.3%が認定されているため、陸で約10%、海については約17%の追加認定が必要となり、陸地については各地で新たな活動が必要となると考えられる。また、2015（平成27）年には国際連合で主に開発途上国の現況の改善を対象としたMDGs（ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals））の後継目標として、全世界での取組を目指すSDGs（持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals））が採択され、目標年の2030年に向けて、生物多様性の保全や持続可能な利用を推進するように示されている。

日本では、絶滅の危機に瀕している野生生物の種の保護のため、1992（平成4）年に「絶滅のおそれのある野生生物の種の保存に関する法律」が制定され、翌年から施行されている。1995（平成7）年には最初の生物多様性国家戦略が策定され、順次見直しが行われている。また、2008（平成20）年には生物多様性基本法が制定され、これにより各地域で生物多様性地域戦略の策定が推進された。

近年、自然保護や生物多様性の保全の考え方についても、種単独の保護から、生息・生育環境を含む自然生態系の保全へと変わり、さらに人間の持続的な利用も含めた生物多様性の保全へと、対象が変化している。

こうした中で、都道府県や市町村のレッドリストやレッドデータブックは、各地域で生物多様性を保全し、後世にその恵みを継承するための基礎資料の1つとして役立てられており、各地の状況や時代に対応するため新たな作成や改訂が続けられている。

2. 「レッドデータブックとっとり」の背景と目的

鳥取県のレッドデータブックは、鳥取県自然環境保全条例（第4条）に基づき、植生及び野生動物に関する調査その他自然環境の保全のために講ずべき施策の策定に必要な基礎調査を取りまとめた資料の1つとして、各方面の協力を得て、「レッドデータブックとっとり」のタイトルのもとに2002（平成14）年に初版が作成・発行された。2012（平成24）年には、初版発刊後10年間で蓄積された県内の野生動植物に関する知見と当時の最新の情報を反映させるため第2版を発刊した。

この第2版発刊後の10年間には、愛知目標の期限を迎え、次期愛知目標をCBD・COP15で検討が行われたり、SDGsが採択され、その目標の達成に向けた動きが活発になったことで、生物多様性の保全、持続的な利用に向けた

動きが加速している。

鳥取県での生物多様性についての話題としては、東部ではシカによる植生被害が特に深刻化しており、生態系そのものの劣化が危惧される。また、2019（平成31）年から鳥取市内でコウノトリが営巣するようになり、2021（令和3）年まで継続して雛の巣立ちが観測されている。中部では2014（平成26）年の三朝東郷湖県立自然公園から大山隠岐国立公園への編入があり、西部では2016（平成28）年ごろからキャラクターによる周知や2017（平成29）年に日本オオサンショウウオの会南部町大会が行われ、町や県による保護指針等策定によりオオサンショウウオの保護等の機運が高まっている。県全体としては2019（令和元）年度に「人と自然と共生するとっとり」の実現を目指して県内の有識者や生物多様性に関する活動を行っている団体と協力し、「鳥取県生物多様性地域戦略」を策定した。さらに、民産学官が連携して生物多様性の保全や持続可能な利用の取り組みを進めるため、戦略の実行機関として2020（令和2）年度に「とっとり生物多様性推進センター」を立ち上げ、開発事業における野生動植物の配慮の推進や、希少種保全に係る活動支援を行っている。

今回、第2版の発刊から10年が経過する中で、新たに得られた知見を反映させ、第3版となる本書の発刊を行った。編集作業においては、新型コロナウイルス感染症の影響で思うように分科会が開催できず、各専門家等による補足調査等も実施が困難な状況であった。また、現在まで県の生物多様性を担っていただいている各分類の有識者や愛好家の高齢化が顕著になり、後継者の育成が急がれる状態になっている。

今後も、本書が開発事業における野生動植物への配慮や鳥取県における30 by 30の対応等、様々な形で推進されている生物多様性の保全や持続可能な利用の一助となることを願う。

III章 改訂の概要

Summary of the Revision

1. 調査・選定の体制

「レッドデータブックとっとり第3版」(以下、RDB3)作成の、調査・選定体制は下図のとおりである。初めに、レッドデータブックとっとり改訂検討会を組織し、「鳥取県版レッドリスト第3版」(以下、RL3)掲載種の選定やRDB3作成の編集方針を検討した。

次に掲載種を大きく動植物分野に2分して調査部会を設置し、その下の分類ごとの分科会やワーキンググループにおいて文献や補足調査、情報収集によるRL3の掲載種

の選定や、RDB3について掲載種の記事作成や写真の収集・選定を行った。検討会や分科会等では、県内外の野生生物研究に携わる大学、試験研究機関、学校関係の専門家、ならびに野生動植物の専門的知識を有する民間の研究者・愛好家の方々にご協力をいただいた。写真や情報提供で協力いただいた方も含め、今回、RDB3作成に関係いただいた方々は、次ページに示すとおりである。

RL3の集約意見の整理やRDB3の記事や写真の収集、版下の作成等業務は外部委託を行った。

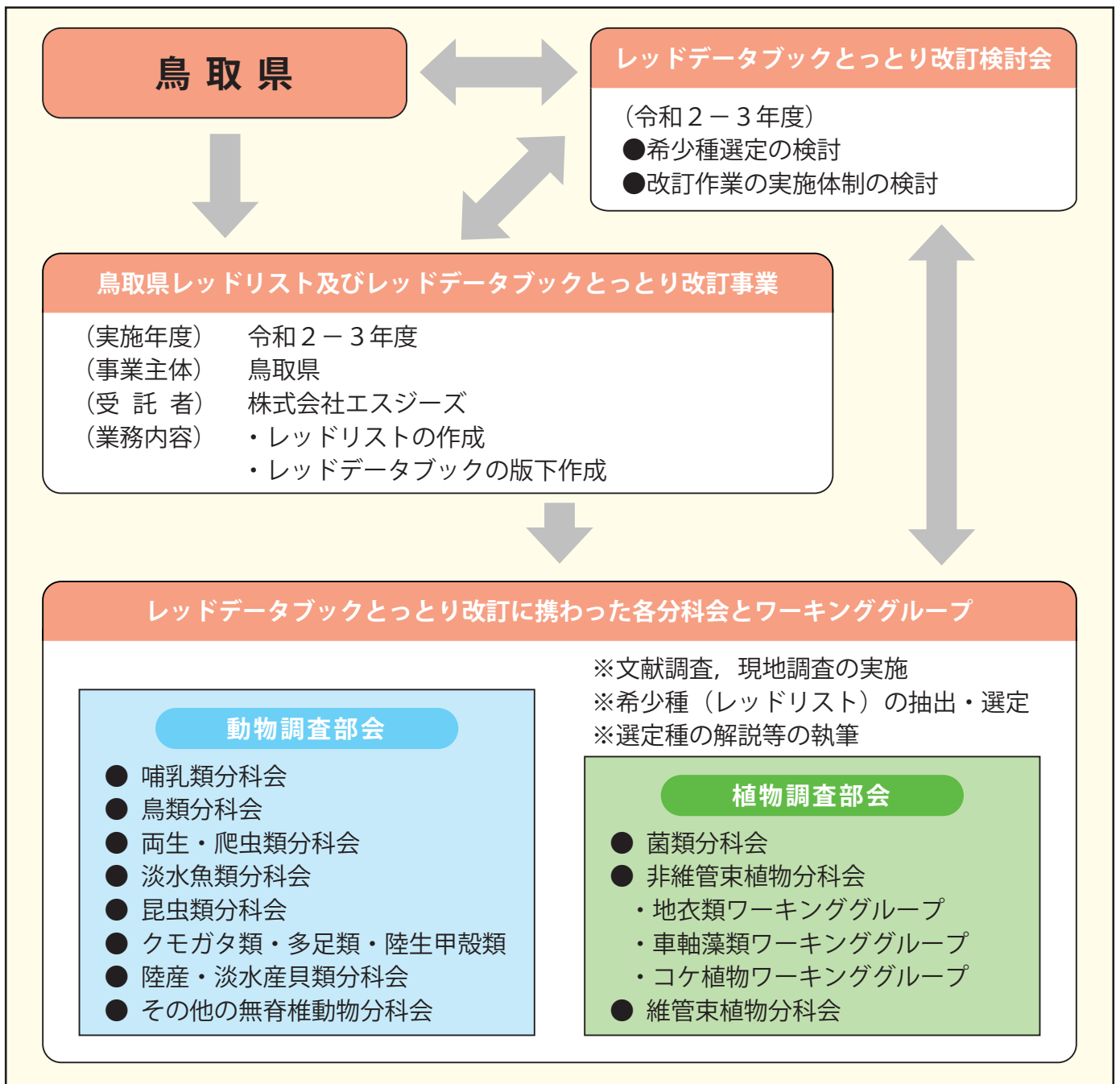


図1. 調査選定の実施体制

レッドデータブックとっとり改訂検討会

永松 大 鳥取大学農学部
 鶴崎展巨 鳥取大学名誉教授
 有川智己 慶應義塾大学生物学教室
 事務局 鳥取県生活環境部 緑豊かな自然課
 株式会社エスジーズ

分科会とワーキンググループ

お名前前の配列は分類群ごとに五十音順
 ◎は分科会または各ワーキンググループの代表者
 所属欄の [] は居住地を示す

■動物 (全体編集：鶴崎展巨)

◆哺乳類分科会

一澤 圭 鳥取県立博物館
 井上貴央 鳥取大学名誉教授
 岡田 純 NPO 法人日本ハンザキ研究所
 岡田珠美 鳥取県生物学会会員
 ◎小林朋道 公立鳥取環境大学
 西 信介 鳥取県鳥獣対策センター

◆鳥類分科会

◎一澤 圭 (前掲)
 岡垣大志 NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部会員
 神谷 要 (公財) 中海水鳥国際交流基金財団
 桐原佳介 鳥取県生物学会会員
 下田康生 NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部会員
 鈴木 仁 NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部会員
 田中一郎 NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部会員
 津森 宏 NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部会員
 土居克夫 NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部長
 戸川信吾 NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部会員
 中前雄一郎 海洋調査船ヤング丸 船長
 吉田 亮 NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部会員
 吉田良平 NPO 法人日本野鳥の会鳥取県支部会員

◆両生・爬虫類分科会

◎岡田 純 (前掲)
 川上 靖 鳥取県立博物館
 剣持康弘 株式会社ウエスコ

◆淡水魚類分科会

◎安藤重敏 鳥取県生物学会会員
 小林朋道 (前掲)
 坂本大騎 伯耆のタビラをまもる会会員
 中前雄一郎 (前掲)
 林 耕介 鳥取県立鳥取西高等学校
 原 竜也 (一財) 広島県環境保健協会
 福本一彦 鳥取県生物学会会員
 星川和夫 鳥取県生物学会会員

◆昆虫類分科会

稲田和久 兵庫陸水生物研究会事務局(カワゲラ類)
 太田悠造 鳥取県立山陰海岸ジオパーク海と大地の
 自然館

大浜祥治 山陰むしの会会員(トンボ類)
 大生唯統 鳥取大学農学部持続性社会創生科学研究
 科(甲虫, 半翅目)
 加藤 学 株式会社山田養蜂場養蜂部(ハチ類)
 川上 靖 (前掲)(バッタ類など)
 桐原佳介 (前掲)
 國本洗紀 鳥取昆虫同好会会員(甲虫類, チョウ類)
 祖田 周 山陰むしの会会員(トンボ類)
 田村昭夫 鳥取昆虫同好会会員(チョウ類など)
 ◎鶴崎展巨 (前掲)(ウスバカゲロウ類など)
 永幡嘉之 自然写真家(チョウ類, 甲虫類など)
 林 成多 ホシザキ野生生物研究所(甲虫類など)
 福田侑記 [鳥取県倉吉市](甲虫類)
 星川和夫 鳥取県生物学会会員(甲虫類)
 前田泰生 島根大学名誉教授(ハチ類など)
 松井悠樹 鳥取大学大学院連合農学研究科(ガ類)
 松田裕一 鳥取昆虫同好会会員(チョウ類)
 宮永龍一 島根大学生物資源科学部(ハナバチ類)
 淀江賢一郎 山陰むしの会会長(チョウ類)

◆クモガタ類・多足類・甲殻類

太田悠造 (前掲)(十脚類)
 大生唯統 (前掲)
 唐沢重考 鳥取大学農学部(等脚類)
 田辺 力 熊本大学大学院先端科学研究部(多足類)
 ◎鶴崎展巨 (前掲)(クモガタ類, 多足類)
 布村 昇 金沢大学環日本海環境研究センター(等
 脚類)

◆陸産・淡水産貝類分科会

鈴木 武 兵庫県立人と自然の博物館
 高田良二 西宮市貝類館
 ◎鶴崎展巨 (前掲)
 中島良典 日本貝類学会会員
 福本一彦 (前掲)
 湊 宏 日本貝類学会名誉会員

◆その他の無脊椎動物分科会

太田悠造 (前掲)(頭索類)
 川勝正治 藤女子短大名誉教授(プラナリア類)
 ◎鶴崎展巨 (前掲)(プラナリア類)
 益田芳樹 川崎医療福祉大学総合教育センター(淡
 水カイメン類)

■植物 (菌類と地衣類を便宜的に含む)

(全体編集：永松 大)

◆菌類分科会

牛島秀爾 (一財) 日本きのこセンター菌茸研究所
 長澤栄史 (一財) 日本きのこセンター菌茸研究所
 ◎前川二郎 鳥取大学名誉教授

◆非維管束植物分科会 (全体編集：有川智己)

(下記3ワーキンググループを含む)

◎有川智己 (前掲)
 大村嘉人 国立科学博物館

坂山 英俊 神戸大学大学院理学研究科
西村 直樹 岡山コケの会代表

【地衣類ワーキンググループ】

◎大村 嘉人 (前 掲)
永松 大 (前 掲)
宮脇 博巳 佐賀大学名誉教授

【車軸藻類ワーキンググループ】

赤井 伸江 株式会社エスジーズ
神谷 要 (前 掲)

◎坂山 英俊 (前 掲)

【コケ植物ワーキンググループ】

◎有川 智己 (前 掲)
岩田 和鷹 岡山コケの会会員
川合 啓二 岡山コケの会会員
木口 博史 岡山コケの会会員
西村 直樹 (前 掲)
山田 遼 岡山コケの会会員

◆維管束植物分科会

赤井 伸江 (前 掲)
磯江 茂秋 倉吉博物館自然科学研究会会員
一澤 麻子 鳥取県生物学会会員
井上 喜美子 鳥取県生物学会会員
祝原 幸治 一般財団法人自然公園財団
上田 康恵
岡田 祐哉 鳥取県生物学会会員
神谷 要 (前 掲)
木村 順二 希少野生植物保護の会会員
清末 忠人
清末 幸久 鳥取県立博物館
桐原 真希 鳥取県生物学会会員
國野 和昭
坂田 成孝 鳥取県植物誌研究会会員
澤田 達也
汐田 達哉 米子工業高等専門学校
鷺見 寛幸 大山町教育委員会
田中 修一 鳥取県生活環境部 緑豊かな自然課
坪倉 敏 希少野生植物保護の会会員
時岡 昭人
◎永松 大 (前 掲)
長棟 光祐 鳥取県生物学会会員
浜田 幸夫 希少野生植物保護の会会員
浜橋 和子 鳥取県生物学会会員
針本 翔太 株式会社ウエスコ
日置 佳之 鳥取大学農学部
平川 誠 鳥取自然保護の会会員
藤原文子 希少野生植物保護の会会員
前田 雄一 元鳥取県林業試験場
松本 綾
矢田 貝繁明 鳥取県立大山自然歴史館
山本 賢二 鳥取県生物学会会員
山本 晴恵 鳥取県生物学会会員

米澤 朋子 鳥取県生物学会会員

■原稿執筆協力

●動物

安倍 弘 日本大学生物資源科学部(コロナギサダニ)
井上 貴央 (前 掲) (タンチョウ)
奥島 雄一 倉敷市立自然史博物館(ジョウカイボン)
中 秀司 鳥取大学農学部(ガ1種)
中野 隆文 京都大学大学院理学研究科(ミドリビル)
山岸 瑞樹 鳥取大学大学院(ガ1種)
山地 治 日本甲虫学会会員(甲虫類3種)
横畑 泰志 富山大学理学部(ヒメヒミズ)

■写真協力者(五十音順)

●動物

安東新吾, 家山博史, 板野 隆, 市原晨太郎, 伊藤 昇,
井上牧雄, 上野吉雄, 浦田 慎, 尾原和夫, 加藤貞和,
金田直人, 川田理恵子, 北山 拓, 桐原真希, 小西広視,
子安和弘, 坂田国嗣, 佐々木亮, 佐藤隆士, 佐貫方城,
澤島拓夫, 清水 晃, 谷岡 浩, 谷島 昂, 田村晴久,
徳永年彦, 中島 悟, 長瀬 翔, 中村具見, 長谷川寿一,
阪田睦子, 緋田祐太, 干村隆司, 平田滋樹, 藤井星渚,
増馬健一, 増田 修, 松本吏樹郎, 水井颯麻, 三宅哲郎,
村上賀史, 保井 浩, 矢田貝繁明, 矢野重明, 矢野重文,
吉田 謙

●非維管束植物

秋山弘之, 牛島秀爾, 小口魁斗, 長棟光祐, 矢田貝繁明

●維管束植物

池本省吾, 加藤 修, 故木原清志, 故小林一彦,
小林禧樹, 世羅徹哉, 松岡成久, 松岡嘉之, 松本哲也,
丸岡道行

■その他(データ収集など)の協力者(五十音順)

●動物

宇野 明, 大塚 攻, 尾田昌紀, 小林佳崇, 後藤哲雄,
田邊佳紀, 鶴 智之, 中島良典, 福田紀生, 三原菜美,
守安 敦

●菌類・地衣類・植物

伊澤寛治, 遠藤直樹, 大水孝介, 加藤敦子, 角野康郎,
狩山俊悟, 木場英久, 木原悦子, 小林京子, 早乙女梢,
田村英子, 長谷川貞昭, 藤井伸二, 藤田順之助, 古
木達郎, 星野卓二, 牧 嘉裕, 正木智美, 本池祐貴,
山本義則, 遊川知久, 吉武和次郎

●団体・機関等

大阪市立自然史博物館, 慶應義塾大学生物学教室, 国
土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所, 同 鳥
取河川国道事務所, 同 日野川河川事務所, 国立科学
博物館, 鳥取県鳥獣対策センター, 鳥取大学農学部
植物生態学研究室, 鳥取大学農学部附属菌類きのこ遺
伝資源研究センター, 鳥取県立博物館, (公財)中海
水鳥国際交流基金財団, 氷ノ山自然ふれあい館響の森
(所属等は令和4年1月現在)

2. 調査・選定対象の範囲

RL3・RDB3の対象とする分類群の範囲は環境省のレッドリストの分類群に準じ、一般によく知られており、生物的知見（分類、分布、生活史等）が比較的蓄積されている種（動物では亜種、植物では変種を含む）を多く含む下記の分類群を第2版と同様に採用した。

- (1) 動物：哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類、昆虫類、甲殻類、多足類、クモガタ類、陸産・淡水産貝類、その他の無脊椎動物（扁形動物、海綿動物、原索動物）。ただし、陸産・淡水産（生活史の一部を陸水域で過ごす動物も含む）及び陸域と緊密な関係をもつ浅海海岸域の動物。
- (2) 非維管束植物：菌類、地衣類、車軸藻類、コケ植物。
- (3) 維管束植物：シダ植物、種子植物。

3. 選定・評価の方法

(1) 選定の方法

RL3・RDB3の掲載種の選定は、各種の文献・収蔵標本の調査および現地調査によって得られた鳥取県内における分布情報をもとに、各種の生息・生育地の数や分布域の広さ、個体群の大きさなどの生息・生育情報の分析を行った。

過去の生息・生育実態に関する定量的なデータが少ないため、種ごとに生息・生育環境の実態や、人為的な圧力の程度についての定性的な分析・検討を、分類群ごとに複数の専門家によって行った。

種の抽出・選定作業は、表1に示す点を考慮して行った。また、次に該当する種は選定対象外とした。

- 1) 明らかに外来種、移入種と判明しているもの。
- 2) 迷鳥や迷チョウなど、鳥取県内に安定的に生息しているとは考えにくい種。
- 3) 最初から記録がまれな種（いわゆる珍品の類い）。

(2) カテゴリー別評価の方法

RL3・RDB3で選定する種の絶滅のおそれの程度について、表2のとおりカテゴリー（希少度のランク）別の基準を設定した。カテゴリーの定義については、全国レベルと県レベルの比較を容易にするため、基本的に環境省(2020)のカテゴリーに準じ、これに県独自のカテゴリーを加えて設定した。ただし、本県では、種や生息・生育地の減少度について定量的知見が少なく、数値による評価が不可能な種が多いため、定性的要件に基づいたカテゴリーとしている。

カテゴリー区分は、「絶滅 (EX)」、「野生絶滅 (EW)」、「絶滅危惧 I 類 (CR+EN)」、「絶滅危惧 II 類 (VU)」、「準絶滅危惧 (NT)」、「情報不足 (DD)」の5つの区分に加え、県独自のカテゴリーとして「その他の保護上重要な種 (OT)」を設けた。

環境省とは異なるカテゴリーについて、「絶滅危惧 I 類 (CR+EN)」は、定量的要件による明確な区分が困難であることから、今回も環境省カテゴリーの「絶滅危惧 IA 類 (CR)」と「絶滅危惧 IB 類 (EN)」には細分していない。また、「その他の保護上重要な種 (OT)」は、生息・生育基盤は比較的安定しているが、生息・生育地が限定されており、県内に分布限界等が存在している種、あるいは、県内で地理的分化がみられ、異なる地理型間で移行帯が成立しているなどの理由で保護上重要度の高い種などを含むカテゴリーである。なお、この区分は、第2版に引き続き、国外からの外来移入種に限らず、野生動植物を国内の別の自然地域に人為的にむやみに移動・移植させるなど、地域固有の野生動植物の遺伝子や生態系の攪乱につながる行為が増加している現状も考慮している。

選定した種の絶滅のおそれの程度について、カテゴリー別の基準にしたがって評価を行った。

表1. 選定の考え方

選定の考え方	概念図 (生息・生育状況)	
	過去	現在
① 限定された特殊な場所に生息・生育し、もともと個体数が少ない種、個体群が小さい種、地理的な固有性が高く分布域が狭い種で、現在の状況が、圧迫要因の作用など生息・生育条件の変化により絶滅する危険性のある種	(●)	●
② もともと個体数が少ない種、個体群が小さい種、分布域が狭い種で、過去から現在に至るまでの間に何らかの要因により生息・生育条件が悪化し、さらに個体数が減少あるいは個体群・分布域が狭小化している種であって、圧迫要因が引き続き作用する場合に絶滅する危険性のある種	● ● ●	● ●
③ かつては個体数が多かった種、あるいは大きな個体群であった種で、過去から現在に至るまでの間に何らかの要因により生息・生育条件が悪化し、個体数が減少あるいは個体群・分布域が狭小化している種であって、圧迫要因が引き続き作用する場合に絶滅する危険性のある種	● ●	● ●

表2. 「鳥取県の絶滅のおそれのある野生動植物種のリスト」のカテゴリ定義

区分および基本概念		具体的要件
絶滅 Extinct (EX)	鳥取県ではすでに絶滅したと考えられる種	過去に鳥取県に生息・生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、鳥取県ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅 Extinct in the Wild (EW)	野生では絶滅し、飼育・栽培下でのみ存続している種	過去に鳥取県に生息・生育したことが確認されており飼育・栽培下では存続しているが、県内において野生ではすでに絶滅したと考えられる種 【確実な情報があるもの】 ① 信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。 ② 信頼できる複数の調査によっても、生息・生育が確認できなかった。 ③ 過去 50 年間前後の間に信頼できる生息・生育情報が得られていない。
絶滅危惧Ⅰ類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ① 既知のすべての個体群で、個体数が著しく少ない、あるいは危機的水準にまで減少している。 ② 既知のすべての生息・生育地で、生存の条件が著しく悪化している。 ③ 既知のすべての個体群が、その再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされているなど、その分布域で種の存続に支障をきたす要因が作用している。 【情報量が少ないもの】 それほど遠くない過去（30年～50年）の生息・生育記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。
絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable (VU)	絶滅の危険が増大している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 ① 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ② 大部分の生息・生育地で生息・生育条件が明らかに悪化しつつある。 ③ 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされているなど、分布域の相当部分で種の存続に支障をきたす要因が作用している。
準絶滅危惧 Near Threatened (NT)	存続基盤が脆弱な種 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息・生育条件の変化によっては「絶滅危惧」の上位ランクに移行する要素を有するもの。	生息・生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがある種 a) 個体数が減少している。 b) 生息・生育条件が悪化している。 c) 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けているなど、種の存続に支障をきたす要因が作用している。
情報不足 Data Deficient (DD)	評価するだけの情報が不足している種	次のいずれかの要素を有しているが、生息・生育状況など、ランクを判定するに足る情報が得られていない種 a) どの生息・生育地においても生息・生育密度が低く希少である。 b) 生息・生育地が局限されている。 c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 d) 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要とする。
その他の保護上重要な種 Others (OT)	鳥取県の地理的な自然特性等から保護上重要度の高い種	生息・生育基盤は比較的安定しているが、生息・生育地等が限定されており、県内に分布限界等が存在する種、県内で地理的分化がみられ、地理型間で交雑等を形成している種など、主として地理的特性から保護上重要度が高いと考えられる種。

IV章 選定結果

Results

今回の改訂作業で、鳥取県内で絶滅のおそれが生じている種としてレッドリストに選定された野生動植物の種数は表3のとおりである。また、図2には初版2002年、改訂

版2012年と今回の第3版2022年における各分類群の選定種数の変化を図示した。以下にその概要を述べる。

表3. カテゴリ別選定種数

区分	EX	EW	CR+EN	VU	NT	DD	OT	計
01 哺乳類	4	0	1	5	10	4	0	24
02 鳥類	1	0	21	17	38	5	0	82
03 爬虫類	0	0	1	0	1	3	0	5
両生類	0	0	1	2	6	0	2	11
04 淡水魚類	0	0	4	5	8	3	0	20
05 昆虫類	12	1	14	41	93	55	6	222
06 陸生甲殻類	0	0	0	0	1	5	0	6
多足類	0	0	0	0	0	2	0	2
クモガタ類	0	0	0	3	6	2	9	20
07 陸産・淡水産貝類	0	0	12	2	23	8	3	48
08 その他の無脊椎動物	0	0	0	0	1	3	1	5
小計	17	1	54	75	187	90	21	445
09 菌類	0	0	0	5	4	0	0	9
10 地衣類	0	0	1	1	1	4	0	7
小計	0	0	1	6	5	4	0	16
11 車軸藻類	0	0	7	1	0	4	0	12
12 コケ植物	0	0	0	5	10	5	2	22
小計	0	0	7	6	10	9	2	34
13 維管束植物 (シダ植物)	3	0	16	21	17	2	0	59
維管束植物 (種子植物)	6	2	103	146	140	16	19	432
小計	9	2	119	167	157	18	19	491
合計	26	3	181	254	359	121	42	986

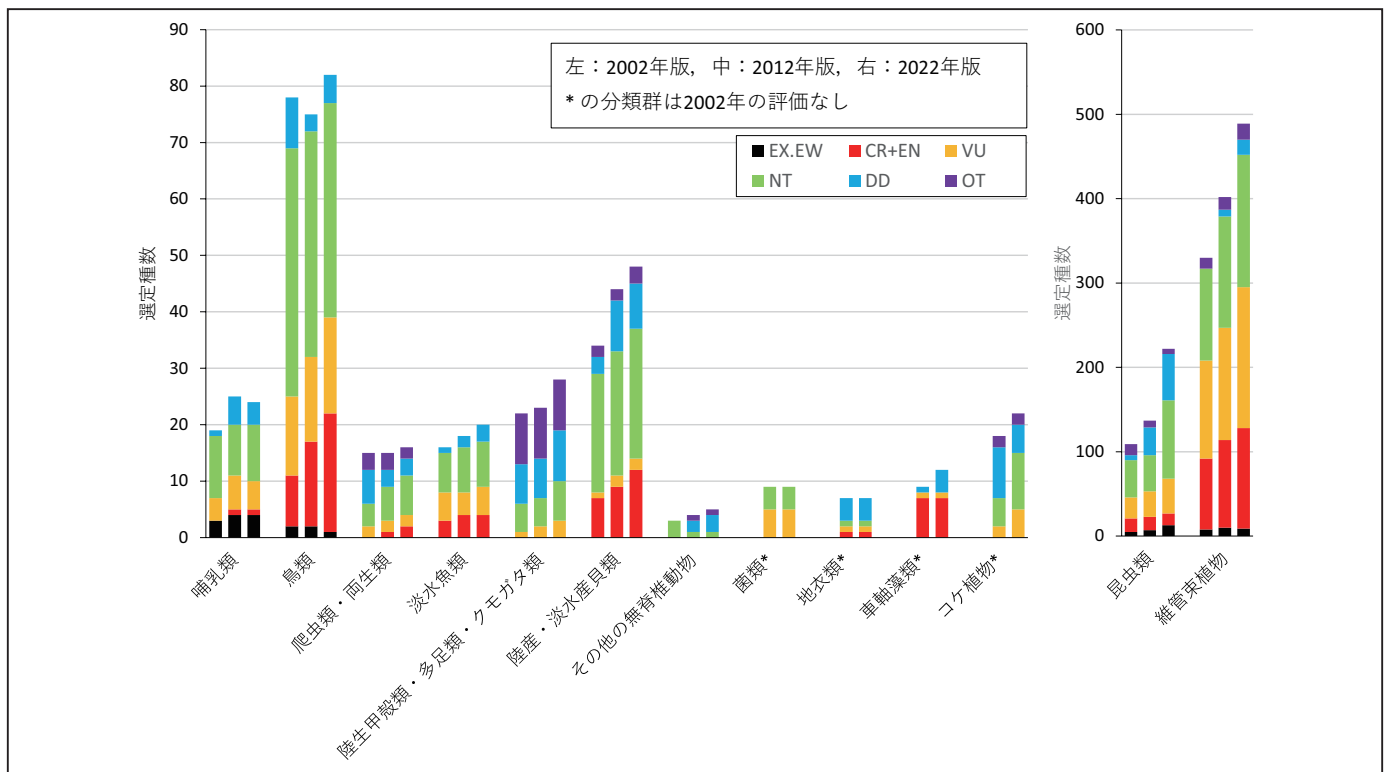


図2. 選定種数の変化

IV章
選定結果

1) 今回の改訂で選定された種数は、全てのカテゴリーの合計値で、哺乳類 24 種、鳥類 82 種、爬虫類 5 種、両生類 11 種、淡水魚類 20 種、昆虫類 222 種、陸生甲殻類 6 種、多足類 2 種、クモガタ類 20 種、陸産・淡水産貝類 48 種、その他の無脊椎動物 5 種、菌類 9 種、地衣類 7 種、車軸藻類 12 種、コケ植物 22 種、シダ植物 59 種、種子植物 432 種であった。まとめると動物が 445 種、植物+菌類+地衣類が 541 種の合計 986 種で、2012 年の改訂版に掲載された 788 種からは 198 種の増加 (25%増) となった。2002 年の初版に掲載されたのは計 626 種で改訂版では 162 種の増加 (26%増) であったので、10 年ぶりの今改訂でも掲載種数の増加は衰えていない。特に昆虫類と維管束植物では増加幅が大きかった。前回 2012 年の改訂から検討に加えられた地衣類、車軸藻類、コケ植物では、県外の専門家と県内の調査者の協力により新たな知見を得てリストが改訂された。

カテゴリー別選定種数の内訳は「絶滅 (EX と EW の合計)」29 種、「絶滅危惧 I 類 (CR+EN)」181 種、「絶滅危惧 II 類 (VU)」254 種、「準絶滅危惧 (NT)」359 種、「情報不足 (DD)」121 種、「その他の保護上重要な種 (OT)」42 種である。いずれのカテゴリーも 2012 年の改訂版よりも増加した。特に「情報不足 (DD)」は前回の計 86 種から今回は 121 種へと大きく増加しており、鳥取県内での生息・生育実態の情報が少なく、絶滅危険性が評価できない種がまだ多数存在していることがわかる。

2) 鳥取県内で既に絶滅したと考えられる種 (「絶滅 (EX)」, 以下, (新) は今回新たに絶滅と判定した種) は、ニホンオオカミ, ニホンカワウソ, ニホンアシカ, ニホンカモシカ, タンチョウ, コバネアオイトトンボ, マイコアカネ (新), ナニワトンボ, カワラバツタ, ハラビロハンミョウ (新), ダイコクコガネ (新), フサヒゲルリカミキリ (新), アサカミキリ, ヒョウモンモドキ, オオウラギンヒョウモン, シータテハ, ダイセンセダカモクメ (新) (以上, 動物), アスヒカズラ, デンジソウ, サンショウモ, クロベ, ハマビシ (新), ヒメビシ (新), カイジンドウ (新), ガガブタ, ヌマダイコン (以上, 植物) の 26 種である。このほか野生絶滅 (EW) と判定された種がウスイロヒョウモンモドキ (新) (以上, 動物), フジバカマ, ヒメシロアサザ (以上, 植物) の 3 種あった。なお、哺乳類と鳥類の絶滅種は、前回選定時同様に遺跡からの出土遺物や明治時代の狩猟記録に基づいたものである。今回新たに絶滅 (野生絶滅) と判定されたハラビロハンミョウ, フサヒゲルリカミキリ, ウスイロヒョウモンモドキなどは、以前から保護・保全の動きがあった種群だが、活動によっても絶滅 (野生絶滅) を食い止めることができず、残念なことである。

前回、「絶滅 (EX)」と判定していたが、その後、県内から生息・生育が再確認され、「絶滅 (EX)」から外したものが 5 種ある。コウノトリ (以上, 動物), クラガリシダ, ヤナギスブタ, ダイセンアシボソスゲ, アサザ (以上, 植物) である。絶滅判定が性急すぎたのではないかという批判はあるが、上記の植物 4 種はこれまで全く報告がなかった場所や 40 年ぶりの再発見によるもので、むしろ調査者の

努力に敬意を表するのが妥当と思われる。いずれも生息・生育基盤はきわめて脆弱であり、これらの種の今後の状況には最大限の注意が必要である。

3) 近い将来における絶滅危険度が高い「絶滅危惧 I 類 (CR+EN)」および絶滅の危険が増大している「絶滅危惧 II 類 (VU)」は総計 435 種で、2012 年の 361 種よりも 20%増加した。このうち「絶滅危惧 I 類 (CR+EN)」が 158 種から 181 種へ 15%増加したのに対して、「絶滅危惧 II 類 (VU)」は 203 種から 254 種に 25%の増加となった。これは、これまでの継続的な生息・生育状況の調査から I 類とするほどの絶滅危険性ではないと評価され、「絶滅危惧 II 類 (VU)」にカテゴリーを緩めた種があった一方で、あらたに「絶滅危惧 I 類 (CR+EN)」に位置づけた種が多数あったためである。図 2「選定種数の変化」から「絶滅危惧 I 類 (CR+EN)」の増加が目立つのは鳥類、陸産・淡水産貝類、および種子植物 (維管束植物) である。この要因については、各分類群の「概要」で確認いただきたい。なお、これまでと同様に、今回も「絶滅危惧 I 類 (CR+EN)」のうち「絶滅危惧 I A 類 (CR)」と「絶滅危惧 I B 類 (EN)」は区別しなかった。これは、ほとんどの生物群について、本県ではこれら 2 つを区別できるだけの情報の蓄積が十分でないためである。

4) 「準絶滅危惧 (NT)」は、存続基盤が脆弱で生育条件の変化によっては容易に上位カテゴリーに移行する要素を持つ種である。同様の要素を持ちながら、準絶滅危惧 (あるいは他のカテゴリー) に判定するに足る情報がないものは「情報不足 (DD)」とした。「情報不足 (DD)」としてあげられている種は動物に多く、なかでも昆虫類に多い。これらには、県内では既に絶滅しているかもしれないが、生息・生育記録が乏しく判断ができないというケースも含まれるので、注意が必要である。

5) 「その他の保護上重要な種 (OT)」は、環境省版レッドデータブックには直接相当するものがない鳥取県独自のカテゴリーである。このカテゴリーは、県内では生息・生育個体数が多く、現時点で「種 Species」として絶滅のおそれはないが、県内で外部形態や染色体数などが地理的に分化しており、個々の地理型の分布域 (または複数の地理型間に形成される交雑体 (hybrid zone) の面積) が限定されているようなケースを「保護に留意すべき対象」として位置づけることを目的に設けられた。この定義に基づく指定種は、県内での地理的分化の研究が進んでいるクモガタ類に多い。

このほか、「その他の保護上重要な種 (OT)」には、県内の生息・生育地が、当該種の分布限界 (南西限や北限) に相当し、現状では絶滅の危険性はないものの、生息・生育域の極限度が高い種や、分布域が狭く、県内が当該種の主要な生息・生育地となっている種が含まれる。このような定義のために、「その他の保護上重要な種 (OT)」は他のカテゴリーとは異なり、前回から指定種数にほとんど変動がない (2012 年の 40 種が今回は 42 種)。

6) 鳥取県内に生息・生育する全種数に対するレッドリスト選定種の割合については、各分類群を同じような精度で見積もることは難しい。例えば哺乳類や鳥類などは比較的情報が多いが、種多様性の高い昆虫類は種数が把握できない群がたくさんある。県単位でまとめたリストも乏しく、昆虫類としての見積もりは困難である。菌類も同様である。以下に示す鳥取県内の既知種数に対する割合は、分類群ごとの特性に注意が必要であることに留意してほしい。既知種数の情報については各分類群の概要を参照のこと。

本レッドデータブックの掲載種の鳥取県内既知種数に対する比率(%)は、哺乳類49%(既知種数49)、鳥類22%(同370)、爬虫類24%(同21)、両生類55%(同20)、淡水魚類18%(同113)、昆虫類のうちチョウ類35%(同120)、トンボ目27%(同88)、ハンミョウ科67%(同9)、クモ目1%(同467)、ザトウムシ目27%(同48)、陸産・

淡水産貝類24%(同200)、コケ植物4%(同500)、シダ植物26%(同230)、種子植物25%(同1700)である。また、絶滅危惧種(「絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)」および「絶滅危惧Ⅱ類(VU)」)の分類群別の鳥取県内既知種数に対する比率(%)は、哺乳類12%、鳥類10%、爬虫類5%、両生類15%、淡水魚類8%、チョウ類15%、トンボ目9%、ハンミョウ科33%、クモ目0.4%、ザトウムシ目4%、陸産・淡水産貝類7%、コケ類1%、シダ植物16%、種子植物15%となった。これらの数字は絶滅のおそれのある種が本県においても決して少なくないことを示している。今後も、各分類群ごとに県内生物相の解明を進め、絶滅の危険性がある種の評価精度をあげるとともに、地域の生物多様性維持につとめる必要がある。

(永松大)

鳥取県レッドリスト 2022 選定種一覧

哺乳類	
絶滅(EX) - 4種	
ニホンオオカミ	イヌ科
ニホンカワウソ	イタチ科
ニホンアシカ	アシカ科
ニホンカモシカ	ウシ科
絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN) - 1種	
オヒキコウモリ	オヒキコウモリ科
絶滅危惧Ⅱ類(VU) - 5種	
ミズラモグラ	モグラ科
ヒナコウモリ	ヒナコウモリ科
ヒメホオヒゲコウモリ	ヒナコウモリ科
テングコウモリ	ヒナコウモリ科
ヤマネ	ヤマネ科
準絶滅危惧(NT) - 10種	
カワネズミ	トガリネズミ科
アズマモグラ	モグラ科
コクガシラコウモリ	キクガシラコウモリ科
キクガシラコウモリ	キクガシラコウモリ科
モモジロコウモリ	ヒナコウモリ科
ユビナガコウモリ	ヒナコウモリ科
ニホンリス	リス科
ニホンモモンガ	リス科
ムササビ	リス科
ニホンイタチ	イタチ科
情報不足(DD) - 4種	
ヒメヒミズ	モグラ科
ヤマコウモリ	ヒナコウモリ科
コテングコウモリ	ヒナコウモリ科
ニホンザル	オナガザル科

鳥類	
絶滅(EX) - 1種	
タンチョウ	ツル科
絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN) - 21種	
コウノトリ	コウノトリ科
ミゾゴイ	サギ科
ヘラサギ	トキ科
クロツラヘラサギ	トキ科
オオジシギ	シギ科
コアジサシ	カモメ科
ウミスズメ	ウミスズメ科
オジロワシ	タカ科
オオワシ	タカ科
チュウヒ	タカ科
ハイイロチュウヒ	タカ科
サシバ	タカ科
イヌワシ	タカ科
クマタカ	タカ科
コミミズク	フクロウ科
ブッポウソウ	ブッポウソウ科
ヤイロチョウ	ヤイロチョウ科
チゴモズ	モズ科
メボソムシクイ	ウグイス科
カヤクグリ	イワヒバリ科
ホオアカ	ホオジロ科
絶滅危惧Ⅱ類(VU) - 17種	
ヒシクイ	カモ科
オオハクチョウ	カモ科
ツクシガモ	カモ科
トモエガモ	カモ科

シノリガモ	カモ科
サンカノゴイ	サギ科
ササゴイ	サギ科
チュウサギ	サギ科
ヨタカ	ヨタカ科
ズグロカモメ	カモメ科
カンムリウミスズメ	ウミスズメ科
オオタカ	タカ科
コノハズク	フクロウ科
トラフズク	フクロウ科
ヤマセミ	カワセミ科
ハヤブサ	ハヤブサ科
コシアカツバメ	ツバメ科
準絶滅危惧 (NT) - 38 種	
マガン	カモ科
コハクチョウ	カモ科
オシドリ	カモ科
ヨシガモ	カモ科
ホオジロガモ	カモ科
ミコアイサ	カモ科
ヨシゴイ	サギ科
ゴイサギ	サギ科
コサギ	サギ科
クロサギ	サギ科
クイナ	クイナ科
タゲリ	チドリ科
イカルチドリ	チドリ科
ワシカモメ	カモメ科
シロカモメ	カモメ科
ミサゴ	ミサゴ科
ハチクマ	タカ科
ツミ	タカ科
ハイタカ	タカ科
ノスリ	タカ科
フクロウ	フクロウ科
アオバズク	フクロウ科
アカショウビン	カワセミ科
オオアカゲラ	キツツキ科
コチョウゲンボウ	ハヤブサ科
サンショウクイ	サンショウクイ科
サンコウチョウ	カササギヒタキ科
クイタダキ	クイタダキ科
エゾムシクイ	ウグイス科
セッカ	セッカ科
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ科
ビンズイ	セキレイ科
コマドリ	ヒタキ科
コルリ	ヒタキ科
マミジロ	ヒタキ科
トラツグミ	ヒタキ科
クロジ	ホオジロ科
ベニヒワ	アトリ科

情報不足 (DD) - 5 種	
ヒメウ	ウ科
タマンギ	タマンギ科
チゴハヤブサ	ハヤブサ科
ホシガラス	カラス科
ルリビタキ	ヒタキ科
両生・爬虫類	
絶滅危惧 I 類 (CR+EN) - 2 種	
アカウミガメ	ウミガメ科
サンインサンショウウオ	サンショウウオ科
絶滅危惧 II 類 (VU) - 2 種	
ヒバサンショウウオ	サンショウウオ科
オオサンショウウオ	オオサンショウウオ科
準絶滅危惧 (NT) - 7 種	
ニホンイシガメ	イシガメ科
チュウゴクブチサンショウウオ	サンショウウオ科
ヒダサンショウウオ	サンショウウオ科
ハコネサンショウウオ	サンショウウオ科
ニホンヒキガエル	ヒキガエル科
ナガレタゴガエル	アカガエル科
ニホンアカガエル	アカガエル科
情報不足 (DD) - 3 種	
ニホンスッポン	スッポン科
タカチホヘビ	タカチホヘビ科
シロマダラ	ナミヘビ科
その他の保護上重要な種 (OT) - 2 種	
アカハライモリ (イモリ)	イモリ科
カジカガエル	アオガエル科
淡水魚類	
絶滅危惧 I 類 (CR+EN) - 4 種	
ミナミアカヒレタビラ	コイ科
ナガレホトケドジョウ	フクドジョウ科
アカザ	アカザ科
ニホンイトヨ	トゲウオ科
絶滅危惧 II 類 (VU) - 5 種	
スナヤツメ南方種	ヤツメウナギ科
ゴギ	サケ科
ミナミメダカ	メダカ科
カジカ大卵型	カジカ科
シロウオ	ハゼ科
準絶滅危惧 (NT) - 8 種	
ニホンウナギ	ウナギ科
ヤリタナゴ	コイ科
サンインコガタスジシマドジョウ	ドジョウ科
ワカサギ	キュウリウオ科
ヤマメ・サクラマス	サケ科
ニッコウイワナ	サケ科
アユカケ	カジカ科
オオヨシノボリ	ハゼ科
情報不足 (DD) - 3 種	
カワヤツメ	ヤツメウナギ科
ドジョウ	ドジョウ科

カワアナゴ	カワアナゴ科
昆 虫 類	
絶滅 (EX) - 12 種	
コバネアオイトトンボ	アオイトトンボ科
マイコアカネ	トンボ科
ナニワトンボ	トンボ科
カワラバッタ	バッタ科
ハラビロハンミョウ	ハンミョウ科
ダイコクコガネ	コガネムシ科
フサヒゲルリカミキリ	カミキリムシ科
アサカミキリ	カミキリムシ科
ヒョウモンモドキ	タテハチョウ科
オオウラギンヒョウモン	タテハチョウ科
シータテハ	タテハチョウ科
ダイセンセダカモクメ	ヤガ科
野生絶滅 (EW) - 1 種	
ウスイロヒョウモンモドキ	タテハチョウ科
絶滅危惧 I 類 (CR+EN) - 14 種	
ムスジイトトンボ	イトトンボ科
ゲンゴロウ	ゲンゴロウ科
ミヤマダイコクコガネ	コガネムシ科
ホシチャバネセセリ	セセリチョウ科
スジボソヤマキチョウ	シロチョウ科
ウラナミアカシジミ	シジミチョウ科
クロシジミ	シジミチョウ科
シルビアシジミ	シジミチョウ科
ゴマシジミ中国・九州亜種	シジミチョウ科
ウラギンスジヒョウモン	タテハチョウ科
メスグロヒョウモン	タテハチョウ科
ウラナミジャノメ	タテハチョウ科
ヒメヒカゲ本州西部亜種	タテハチョウ科
キマダラモドキ	タテハチョウ科
絶滅危惧 II 類 (VU) - 41 種	
モートンイトトンボ	イトトンボ科
アオヤンマ	ヤンマ科
ネアカヨシヤンマ	ヤンマ科
オグマサナエ	サナエトンボ科
キイロヤマトンボ	ヤマトンボ科
ハネビロエゾトンボ	エゾトンボ科
ハッチョウトンボ	トンボ科
カヤコオロギ	マツムシ科
ダイリフキバッタ	バッタ科
タガメ	コオイムシ科
ハルゼミ	セミ科
アイヌハンミョウ	ハンミョウ科
カワラハンミョウ	ハンミョウ科
ホソハンミョウ	ハンミョウ科
オオヒョウタンゴミムシ	オサムシ科
カワラゴミムシ	カワラゴミムシ科
クロゲンゴロウ	ゲンゴロウ科
コガタノゲンゴロウ	ゲンゴロウ科
マルガタゲンゴロウ	ゲンゴロウ科

シマゲンゴロウ	ゲンゴロウ科
ミズスマシ	ミズスマシ科
ゴマフガムシ	ガムシ科
オオクワガタ	クワガタムシ科
マグソクワガタ	クワガタムシ科
ヒメビロウドカミキリ	カミキリムシ科
スゲハムシ	ハムシ科
クロガネネクイハムシ	ハムシ科
ツヤネクイハムシ	ハムシ科
ゴヘイニクバエ	ニクバエ科
ニホンアミカモドキ	アミカモドキ科
ニッポンハナダカバチ	ギングチバチ科
キアシハナダカバチモドキ	ギングチバチ科
キバネセセリ	セセリチョウ科
スジグロチャバネセセリ	セセリチョウ科
ミヤマチャバネセセリ	セセリチョウ科
コキマダラセセリ	セセリチョウ科
ヒメシジミ本州・九州亜種	シジミチョウ科
クモガタヒョウモン	タテハチョウ科
オオムラサキ	タテハチョウ科
スキバホウジャク	スズメガ科
ウスジロドクガ	ドクガ科
準絶滅危惧 (NT) - 93 種	
アオハダトンボ	カワトンボ科
ルリボシヤンマ	ヤンマ科
ホンサナエ	サナエトンボ科
ヒロシマサナエ	サナエトンボ科
キイロサナエ	サナエトンボ科
タベサナエ	サナエトンボ科
エゾトンボ	エゾトンボ科
ヒメアカネ	トンボ科
コノシメトンボ	トンボ科
アキアカネ	トンボ科
ミヤマノギカワゲラ	ヒロムネカワゲラ科
クサカワゲラ属 SB 種	アミメカワゲラ科
コグサヒメカワゲラ属 TD 種	アミメカワゲラ科
ウスバカマキリ	カマキリ科
ハマスズ	ヒバリモドキ科
セグロイナゴ	バッタ科
ショウリョウバッタモドキ	バッタ科
ヤマトマダラバッタ	バッタ科
クルマバッタ	バッタ科
ヒメミズカマキリ	タイコウチ科
タイコウチ	タイコウチ科
コオイムシ	コオイムシ科
オオコオイムシ	コオイムシ科
オオミズムシ	ミズムシ科
エサキアメンボ	アメンボ科
ウデワユミアシサシガメ	サシガメ科
シロヘリツチカメムシ	ツチカメムシ科
ヒメハルゼミ	セミ科
ハマベウスバカゲロウ	ウスバカゲロウ科

クロコウスバカゲロウ	ウスバカゲロウ科
キバネツノトンボ	ツノトンボ科
ナミハンミョウ	ハンミョウ科
エリザハンミョウ	ハンミョウ科
セアカオサムシ	オサムシ科
オグラヒラタゴミムシ	オサムシ科
ヘイケボタル	ホタル科
エグリマメジョウカイ	ジョウカイボン科
ツブゲンゴロウ	ゲンゴロウ科
キボシツブゲンゴロウ	ゲンゴロウ科
オオミズスマシ	ミズスマシ科
キイロコガシラミズムシ	コガシラミズムシ科
ガムシ	ガムシ科
ヤマトゴマフガムシ	ガムシ科
オオチャイロハナムグリ	コガネムシ科
ヨコミゾドロムシ	ヒメドロムシ科
ケスジドロムシ	ヒメドロムシ科
ダイセンマルヒメドロムシ	ヒメドロムシ科
トオヤマシラホシナガタマムシ	タマムシ科
クロコモンタマムシ	タマムシ科
フライシャーナガタマムシ	タマムシ科
ジュウクホシテントウ	テントウムシ科
ルイヨウマダラテントウ	テントウムシ科
シラユキヒメハナカミキリ	カミキリムシ科
クロサワヘリグロハナカミキリ	カミキリムシ科
アカネクスジトラカミキリ	カミキリムシ科
キンイロネクイハムシ	ハムシ科
キオビホオナガスズメバチ本州亜種	スズメバチ科
ヤマトスナハキバチ	ギングチバチ科
アカオビケラトリバチ	ギングチバチ科
クスジツチスガリ	ギングチバチ科
シロスジフトハナバチ	ミツバチ科
ホクダイコハナバチ	コハナバチ科
コウベキヌゲハキリバチ	ハキリバチ科
ホシトガリハナバチ	ハキリバチ科
マイマイツツハナバチ	ハキリバチ科
ギンイチモンジセセリ	セセリチョウ科
オオチャバネセセリ	セセリチョウ科
ウスバシロチョウ	アゲハチョウ科
ギフチョウ	アゲハチョウ科
ジャコウアゲハ	アゲハチョウ科
ツマグロキチョウ	シロチョウ科
ミドリシジミ	シジミチョウ科
ヒサマツミドリシジミ	シジミチョウ科
キリシマミドリシジミ	シジミチョウ科
オオミドリシジミ	シジミチョウ科
クロミドリシジミ	シジミチョウ科
ヒロオビミドリシジミ	シジミチョウ科
ウラジロミドリシジミ	シジミチョウ科
ミヤマカラスシジミ	シジミチョウ科
キマダラルリツバメ	シジミチョウ科
スギタニルシジミ	シジミチョウ科

ミスジチョウ	タテハチョウ科
ホシミスジ	タテハチョウ科
オオヒカゲ	タテハチョウ科
ギンヒゲナガ	ヒゲナガガ科
ヤホシホソマダラ	マダラガ科
アシナガモモプトスカシバ	スカシバガ科
ハマゴウノメイガ	ツトガ科
メンガタズメ	ズズメガ科
ギンボシズメ	ズズメガ科
ギンボシシャチホコ	シャチホコガ科
コシロシタバ	ヤガ科
クロビロードヨトウ	ヤガ科
情報不足 (DD) - 55 種	
オツネトンボ	アオイトトンボ科
ホッケミズムシ	ミズムシ科
イトアメンボ	イトアメンボ科
ゴミアシナガサシガメ	サシガメ科
ズイムシハナカメムシ	ハナカメムシ科
クロアシフトハナカメムシ	ハナカメムシ科
ヒウラヒサゴナガカメムシ	ヒョウタンナガカメムシ科
アカエゾゼミ	ゼミ科
エノキカイガラキジラミ	キジラミ科
ケカゲロウ	ケカゲロウ科
ダイセンツヤゴモクムシ	オサムシ科
イグチケブカゴミムシ	オサムシ科
クビナガヨツボシゴミムシ	オサムシ科
オオトックリゴミムシ	オサムシ科
エチゴトックリゴミムシ	オサムシ科
ニセトックリゴミムシ	オサムシ科
ヒメシマチビゲンゴロウ	ゲンゴロウ科
ケシゲンゴロウ	ゲンゴロウ科
ヒメガムシ	ガムシ科
オニヒラタシデムシ	シデムシ科
セマルヒメドロムシ	ヒメドロムシ科
ハガマルヒメドロムシ	ヒメドロムシ科
ツブスジドロムシ	ヒメドロムシ科
ヨツボシカミキリ	カミキリムシ科
イトウタマユラアブ	シギアブ科
ツヤガシラブユ	ブユ科
ダイセンヤマブユ	ブユ科
コバヤシツノマユブユ	ブユ科
アケボノクモバチ	クモバチ科
アオスジクモバチ	クモバチ科
ヤマトアシナガバチ	スズメバチ科
フジジガバチ	アナバチ科
フクイアナバチ	アナバチ科
キバラハキリバチ	ハキリバチ科
クチキトビケラ	アシエダトビケラ科
ミサキツノトビケラ	ヒゲナガトビケラ科
ヒメキボシオオメイガ	ツトガ科
ミドロミズメイガ	ツトガ科
アカミヤクノメイガ	ツトガ科

キンスジノメイガ	ツトガ科
オビグロスズメ	スズメガ科
フチグロトゲエダシヤク	シヤクガ科
マエモンシロスジアオシヤク	シヤクガ科
ヒメナミガタアオシヤク	シヤクガ科
シロホソバ	ヒトリガ科
ネズミホソバ	ヒトリガ科
シーモンキンウワバ	ヤガ科
キマダラコヤガ	ヤガ科
ウスズミケンモン	ヤガ科
クビグロケンモン	ヤガ科
マイコトラガ	ヤガ科
キュウシュウマエアカシロヨトウ	ヤガ科
ホソバオビキリガ	ヤガ科
カバイロキヨトウ	ヤガ科
ナカスジキヨトウ	ヤガ科
その他の保護上重要な種 (OT) - 6種	
アサヒナカワトンボ	カワトンボ科
ニホンカワトンボ	カワトンボ科
ヤマト (セトウチ) フキバッタ	バッタ科
ジョウカイボン	ジョウカイボン科
オナガシジミ	シジミチョウ科
ミヤマハガタヨトウ	ヤガ科
クモガタ類・多足類・陸生甲殻類	
絶滅危惧II類 (VU) - 3種	
イソコモリグモ	コモリグモ科
スズキコモリグモ	コモリグモ科
ゴホントゲザトウムシ	マザトウムシ科
準絶滅危惧 (NT) - 7種	
スナガニ	スナガニ科
キシノウエトタテグモ	トタテグモ科
キノボリトタテグモ	トタテグモ科
ワスレナグモ	ジグモ科
カロナギサダニ	ウシオダニ科
イラカザトウムシ	カワザトウムシ科
ヒトハリザトウムシ	カワザトウムシ科
情報不足 (DD) - 9種	
ニホンチビヒメフナムシ	フナムシ科
ハナビロハマワラジムシ	シオサイワラジムシ科
ニホンハマワラジムシ	シオサイワラジムシ科
ニッポンヒイロワラジムシ	ウシオワラジムシ科
ニシカワハヤシワラジムシ	ハヤシワラジムシ科
コヤマホラケヤスデ	ホラケヤスデ科
クビオビヤスデ	オビヤスデ科
スナヒメハダニ	ヒメハダニ科
アカスベザトウムシ	カワザトウムシ科
その他の保護上重要な種 (OT) - 9種	
ダイセンニセタテツメザトウムシ	ニセタテツメザトウムシ科
ヒコナミザトウムシ	カワザトウムシ科
オオナミザトウムシ	カワザトウムシ科
サトウナミザトウムシ	カワザトウムシ科
ヤマスベザトウムシ	カワザトウムシ科

ヒライワスベザトウムシ	カワザトウムシ科
アカサビザトウムシ	カワザトウムシ科
オオナガザトウムシ	カワザトウムシ科
フタコブザトウムシ	カワザトウムシ科
陸産・淡水産貝類	
絶滅危惧I類 (CR+EN) - 12種	
クビレイトウムシオイガイ	ムシオイガイ科
ヒョットコイトウムシオイガイ	ムシオイガイ科
ダイオウゴマガイ	ゴマガイ科
ヤママメタニシ	イツマデガイ科
ナガナタネガイ	キバサナギガイ科
パツラマイマイ	パツラマイマイ科
ササノハガイ	イシガイ科
ヨコハマシジラガイ	イシガイ科
マツカサガイ (広域分布種)	イシガイ科
カラスガイ	イシガイ科
カタドブガイ	イシガイ科
マメシジミ	マメシジミ科
絶滅危惧II類 (VU) - 2種	
ホソヒメギセル	キセルガイ科
キタノタガイ	イシガイ科
準絶滅危惧 (NT) - 23種	
イシマキガイ	アマオブネ科
アツブタガイ	ヤマタニシ科
ミヤコムシオイガイ	ムシオイガイ科
アズキガイ	アズキガイ科
マルタニシ	タニシ科
オオタニシ	タニシ科
カワグチツボ	カワグチツボ科
モノアラガイ	モノアラガイ科
キセルガイモドキ	キセルガイモドキ科
フトキセルガイモドキ	キセルガイモドキ科
クリイロキセルガイモドキ	キセルガイモドキ科
オオギセル	キセルガイ科
モリヤギセル	キセルガイ科
ヤマコウラナメクジ	ノコウラナメクジ科
オオコウラナメクジ	オオコウラナメクジ科
サンインコベソマイマイ	ナンバンマイマイ科
コウロマイマイ	オナジマイマイ科
クチベニマイマイ	オナジマイマイ科
イシガイ	イシガイ科
ヌマガイ	イシガイ科
ヤマトシジミ	シジミ科
マシジミ	シジミ科
ウエジマメシジミ	マメシジミ科
情報不足 (DD) - 8種	
ミズゴマツボ	ミズゴマツボ科
ヒラマキミズマイマイ	ヒラマキガイ科
ヒラマキガイモドキ	ヒラマキガイ科
ナガオカモノアラガイ	オカモノアラガイ科
カサネシタラガイ	シタラガイ科
クリイロベッコウマイマイ	ベッコウマイマイ科

コベソマイマイ	ナンバンマイマイ科
アワジオトメマイマイ	オナジマイマイ科
その他の保護上重要な種 (OT) - 3種	
オオゴマガイ	ゴマガイ科
コウダカシロマイマイ	オナジマイマイ科
セトウチマイマイ	オナジマイマイ科
その他の無脊椎動物	
準絶滅危惧 (NT) - 1種	
ミヤマウズムシ	ヒラタウズムシ科
情報不足 (DD) - 3種	
ヒガシナメクジウオ	ナメクジウオ科
ヌマカイメン	タンスイカイメン科
ミドリビル	ヒラタビル科
その他の保護上重要な種 (OT) - 1種	
シロカイメン	タンスイカイメン科
菌類	
絶滅危惧II類 (VU) - 5種	
キツネノサカズキ	オオゴムタケ科
シロタモギタケ	シメジ科
タモギタケ	ヒラタケ科
ヌメリアイタケ	ニンギョウウタケモドキ科
コカンバタケ	ツガサルノコシカケ科
準絶滅危惧 (NT) - 4種	
キツネノワン	キンカクキン科
キツネノヤリ	キンカクキン科
チョレイマイタケ	タマチョレイタケ科
ニカワショウロ	スッポントケ科
地衣類	
絶滅危惧I類 (CR+EN) - 1種	
フルイサルオガセ	ウメノキゴケ科
絶滅危惧II類 (VU) - 1種	
イワタケ	イワタケ科
準絶滅危惧 (NT) - 1種	
アカサルオガセ	ウメノキゴケ科
情報不足 (DD) - 4種	
イコマウメノキゴケ	ウメノキゴケ科
ナリアイウメノキゴケ	ウメノキゴケ科
トゲサルオガセ	ウメノキゴケ科
アカヒゲゴケ	ウメノキゴケ科
車軸藻類	
絶滅危惧I類 (CR+EN) - 7種	
イトシャジクモ	シャジクモ科
オウシャジクモ	シャジクモ科
ソデマクリシャジクモ	シャジクモ科
ヒメフラスコモ	シャジクモ科
キヌフラスコモ	シャジクモ科
フタマタフラスコモ	シャジクモ科
セイロンフラスコモ	シャジクモ科
絶滅危惧II類 (VU) - 1種	
シャジクモ	シャジクモ科
情報不足 (DD) - 4種	
シラタマモ	シャジクモ科

トガリフラスコモ	シャジクモ科
モリオカフラスコモ	シャジクモ科
ミルフラスコモ	シャジクモ科
コケ植物	
絶滅危惧II類 (VU) - 5種	
キヌシッポゴケモドキ	キヌシッポゴケ科
ジョウレンホウオウゴケ	ホウオウゴケ科
クロカワゴケ	カワゴケ科
スギバシノブゴケ	ヌマシノブゴケ科
レイシゴケ	ネジレイトゴケ科
準絶滅危惧 (NT) - 10種	
オオミズゴケ	ミズゴケ科
ホソベリミズゴケ	ミズゴケ科
ハリミズゴケ	ミズゴケ科
ウロコミズゴケ	ミズゴケ科
クマノゴケ	イクビゴケ科
ヤマトハクチョウゴケ	ギボウシゴケ科
コキジノオゴケ	クジャクゴケ科
カビゴケ	クサリゴケ科
イチョウウキゴケ	ウキゴケ科
ミヤマミズゼニゴケ	ミヤマミズゼニゴケ科
情報不足 (DD) - 5種	
コアナミズゴケ	ミズゴケ科
イシヅチゴケ	イシヅチゴケ科
イブキタチヒダゴケ	タチヒダゴケ科
カワゴケ	カワゴケ科
キタイタチゴケ	イタチゴケ科
その他の保護上重要な種 (OT) - 2種	
コウヤノマンネングサ	コウヤノマンネングサ科
コマチゴケ	コマチゴケ科
シダ植物	
絶滅 (EX) - 3種	
アスヒカズラ	ヒカゲノカズラ科
デンジソウ	デンジソウ科
オオアカウキクサ	サンショウモ科
絶滅危惧I類 (CR+EN) - 16種	
スギラン	ヒカゲノカズラ科
オオバシナミズニラ	ミズニラ科
ヒメハナワラビ	ハナヤスリ科
エゾフユノハナワラビ	ハナヤスリ科
ナガホノナツノハナワラビ	ハナヤスリ科
ヒロハハナヤスリ	ハナヤスリ科
マツバラ	マツバラ科
ヤシャゼンマイ	ゼンマイ科
ハコネシダ	イノモトソウ科
タキミシダ	イノモトソウ科
ヘイケイヌワラビ	イワデンダ科
シマイヌワラビ	イワデンダ科
イッポンワラビ	イワデンダ科
ヒロハヤブソテツ (狭義)	オシダ科
クラガリシダ	ウラボシ科
オオエゾデンダ	ウラボシ科

絶滅危惧II類 (VU) - 21 種	
ヒメスギラン	ヒカゲノカズラ科
ミズスギ	ヒカゲノカズラ科
マンネンスギ	ヒカゲノカズラ科
ヒモカズラ	イワヒバ科
ミズニラ	ミズニラ科
ハマハナヤスリ	ハナヤスリ科
オウレンシダ	コバノイシカグマ科
フジシダ	コバノイシカグマ科
ミヤコイヌワラビ	イワデンダ科
ハコネシケチシダ	イワデンダ科
フクロシダ	イワデンダ科
ミヤマシシガシラ	シシガシラ科
ミヤコヤブソテツ	オシダ科
キヨズミオオクジャク	オシダ科
アツギノヌカイトチシダマガイ	オシダ科
ナガバノイタチシダ	オシダ科
ホソイノデ	オシダ科
ツルデンダ	オシダ科
カラクサイノデ	オシダ科
ホテイシダ	ウラボシ科
イワオモダカ	ウラボシ科
準絶滅危惧 (NT) - 17 種	
カタヒバ	イワヒバ科
イワヒバ	イワヒバ科
コヒロハハナヤスリ	ハナヤスリ科
オオフジシダ	コバノイシカグマ科
ヌリトラノオ	チャセンシダ科
カミガモシダ	チャセンシダ科
ミヤマワラビ	ヒメシダ科
ミヤマメシダ	イワデンダ科
イワヤシダ	イワデンダ科
イワデンダ	イワデンダ科
オサシダ	シシガシラ科
ハチジョウベニシダ	オシダ科
シノブ	シノブ科
アオネカズラ	ウラボシ科
サジラン	ウラボシ科
クリハラン	ウラボシ科
ビロードシダ	ウラボシ科
情報不足 (DD) - 2 種	
クモノスシダ	チャセンシダ科
オオメシダ	イワデンダ科
種子植物	
絶滅 (EX) - 6 種	
クロベ	ヒノキ科
ハマビシ	ハマビシ科
ヒメビシ	ミソハギ科
カイジンドウ	シソ科
ガガブタ	ミツガシワ科
ヌマダイコン	キク科
野生絶滅 (EW) - 2 種	

ヒメシロアサザ	ミツガシワ科
フジバカマ	キク科
絶滅危惧I類 (CR+EN) - 103 種	
ミヤマビャクシン	ヒノキ科
マイヅルテンナンショウ	サトイモ科
ナギヒロハテンナンショウ	サトイモ科
ナンゴクウラシマソウ	サトイモ科
ヒメザゼンソウ	サトイモ科
イワショウブ	チシマゼキショウ科
マルバオモダカ	オモダカ科
セトヤナギスブタ	トチカガミ科
マルミスブタ	トチカガミ科
スブタ	トチカガミ科
ヤナギスブタ	トチカガミ科
リュウノヒゲモ	ヒルムシロ科
ツツイトモ	ヒルムシロ科
イトクズモ	ヒルムシロ科
カワツルモ	カワツルモ科
ヒナノシャクジョウ	ヒナノシャクジョウ科
ツバメオモト	ユリ科
タケシマラン	ユリ科
ヒナラン	ラン科
マメヅタラン	ラン科
キエビネ	ラン科
サルメンエビネ	ラン科
ユウシュンラン	ラン科
ヒメノヤガラ	ラン科
クマガイソウ	ラン科
イチヨウラン	ラン科
コイチヨウラン	ラン科
カモメラン	ラン科
マツラン	ラン科
シロテンマ	ラン科
ツリシュスラン	ラン科
シュスラン	ラン科
ムカゴソウ	ラン科
フガクスズムシソウ	ラン科
アキタスズムシソウ	ラン科
ノビネチドリ	ラン科
サギソウ	ラン科
ヒトツバキソチドリ	ラン科
コバノトンボソウ	ラン科
ヒナチドリ	ラン科
ウチョウラン	ラン科
クモラン	ラン科
カヤラン	ラン科
コキンバイザサ	キンバイザサ科
ギョウジャニンニク	ヒガンバナ科
ミドリヨウラク	キジカクシ科
ミズアオイ	ミズアオイ科
ヒメミクリ	ガマ科
カンサイイワスゲ	カヤツリグサ科

ホスゲ	カヤツリグサ科
ウマスゲ	カヤツリグサ科
シオクグ	カヤツリグサ科
ダイセンアシボスゲ	カヤツリグサ科
チャボイ	カヤツリグサ科
ミチノクフクジュソウ	キンポウゲ科
ヒルゼンバイカモ	キンポウゲ科
マンセンカラマツ	キンポウゲ科
モミジカラマツ	キンポウゲ科
ベニバナヤマシャクヤク	ボタン科
アオベンケイ	ベンケイソウ科
アズマツメクサ	ベンケイソウ科
タヌキマメ	マメ科
イタチササゲ	マメ科
ヒナノカンザシ	ヒメハギ科
カラフトダイコンソウ	バラ科
コキンバイ	バラ科
オオシラヒゲソウ	ニシキギ科
イソスミレ	スミレ科
サクラスミレ	スミレ科
ホソバシロスミレ	スミレ科
エゾミズタマソウ	アカバナ科
コイヌガラシ	アブラナ科
ミヤマツチトリモチ	ツチトリモチ科
サイコクヌカボ	タデ科
ヤナギヌカボ	タデ科
ゴゼンタチバナ	ミズキ科
サクラソウ	サクラソウ科
コケモモ	ツツジ科
イヌセンブリ	リンドウ科
ヒメナエ	マチン科
シシンラン	イワタバコ科
イワギリソウ	イワタバコ科
スズメハコベ	オオバコ科
ヤマクワガタ	オオバコ科
イヌノフグリ	オオバコ科
トラノオスズカケ	オオバコ科
オウギカズラ	シソ科
ミカエリソウ	シソ科
エゾナミキ	シソ科
テイネニガクサ	シソ科
オオバミゾホオズキ	ハエドクソウ科
ミミカキグサ	タヌキモ科
ホザキノミミカキグサ	タヌキモ科
フクシマシャジン	キキョウ科
シデシャジン	キキョウ科
アサザ	ミツガシワ科
ヒゴタイ	キク科
フクオウソウ	キク科
オオダイトウヒレン	キク科
ヒメヒゴタイ	キク科
コウリンカ	キク科

ウラギク	キク科
ドクゼリ	セリ科
絶滅危惧II類 (VU) - 146種	
ジュンサイ	ジュンサイ科
マルバウマノスズクサ	ウマノスズクサ科
ヒメカンアオイ	ウマノスズクサ科
ムロウテンナンショウ	サトイモ科
チャボゼキショウ	チシマゼキショウ科
ハナゼキショウ	チシマゼキショウ科
アギナシ	オモダカ科
ヒロハトリゲモ (サガミトリゲモ)	トチカガミ科
イトトリゲモ	トチカガミ科
ホッスモ	トチカガミ科
イバラモ	トチカガミ科
ミズオオバコ	トチカガミ科
セキショウモ	トチカガミ科
ホンゴウソウ	ホンゴウソウ科
キバナノアマナ	ユリ科
タマガワホトトギス	ユリ科
ムギラン	ラン科
キンセイラン	ラン科
ギンラン	ラン科
キンラン	ラン科
ササバギンラン	ラン科
クゲヌマラン	ラン科
トケンラン	ラン科
セッコク	ラン科
ミズトンボ	ラン科
ホクリクムヨウラン	ラン科
ジガバチソウ	ラン科
ヨウラクラン	ラン科
ジンバイソウ	ラン科
ミズチドリ	ラン科
マンシュウヤマサギソウ	ラン科
トキソウ	ラン科
ヤマトキソウ	ラン科
オヒガンギボウシ	キジカクシ科
ミクリ	ガマ科
ヤマトミクリ	ガマ科
コガマ	ガマ科
クロホシクサ	ホシクサ科
ベニイトスゲ	カヤツリグサ科
ヒルゼンスゲ	カヤツリグサ科
ヒロバスゲ	カヤツリグサ科
ヤチカワズスゲ	カヤツリグサ科
ナガミヒメスゲ	カヤツリグサ科
ヒメスゲ	カヤツリグサ科
オオカワズスゲ	カヤツリグサ科
ミヤマヌカボ	イネ科
タカネコウボウ	イネ科
タキキビ	イネ科
ヒロハへビノボラズ	メギ科

ユキワリイチゲ	キンポウゲ科
ヤマオダマキ	キンポウゲ科
リュウキンカ	キンポウゲ科
トリガタハンショウヅル	キンポウゲ科
バイカオウレン	キンポウゲ科
ミスミソウ	キンポウゲ科
オキナグサ	キンポウゲ科
バイカモ	キンポウゲ科
オトコゼリ	キンポウゲ科
コウヤミズキ	マンサク科
ザリコミ	スグリ科
イワネコノメソウ	ユキノシタ科
ツルネコノメソウ	ユキノシタ科
チシマネコノメソウ	ユキノシタ科
ヒダボタン	ユキノシタ科
タチモ	アリノトウグサ科
フジキ	マメ科
イヌハギ	マメ科
ツルフジバカマ	マメ科
オオバクサフジ	マメ科
ノウゴウイチゴ	バラ科
リンボク	バラ科
カワラサイコ	バラ科
シャリンバイ	バラ科
ハマナス	バラ科
キビナワシロイチゴ	バラ科
ナガボノワレモコウ (広義)	バラ科
イワガサ	バラ科
マメグミ	グミ科
コバノチョウセンエノキ (広義)	アサ科
サンショウソウ	イラクサ科
ミヤマハンノキ	カバノキ科
ヒトツバハギ	ミカンソウ科
オオバヤナギ	ヤナギ科
ケイリュウタチツボスミレ	スミレ科
マルバスミレ	スミレ科
アナマスミレ	スミレ科
ビッチュウフウロ	フウロソウ科
カジカエデ	ムクロジ科
メグスリノキ	ムクロジ科
ヒナウチワカエデ	ムクロジ科
コショウノキ	ジンチョウゲ科
ミヤマハタザオ	アブラナ科
スズシロソウ	アブラナ科
ヒノキバヤドリギ	ビャクダン科
ホザキヤドリギ	オオバヤドリギ科
イブキトラノオ	タデ科
アオヒメタデ	タデ科
サデクサ	タデ科
ノダイオウ	タデ科
エゾカワラナデシコ	ナデシコ科
クロバイ	ハイノキ科

ベニドウダン	ツツジ科
マルバノイチヤクソウ	ツツジ科
ヒカゲツツジ	ツツジ科
ゲンカイツツジ	ツツジ科
コヨウラクツツジ	ツツジ科
アラゲナツハゼ	ツツジ科
イナモリソウ	アカネ科
エゾリンドウ	リンドウ科
チトセカズラ	マチン科
ホウライカズラ	マチン科
アイナエ	マチン科
キジョラン	キョウチクトウ科
フナバラソウ	キョウチクトウ科
アオフナバラソウ	キョウチクトウ科
ホタルカズラ	ムラサキ科
アオホオズキ	ナス科
トウテイラン	オオバコ科
オオヒナノウスツボ	ゴマノハグサ科
シモバシラ	シソ科
キセワタ	シソ科
タジマタムラソウ	シソ科
ヒメナミキ	シソ科
カリガネソウ	シソ科
オオナンバンギセル	ハマウツボ科
ハマウツボ	ハマウツボ科
トモエシオガマ	ハマウツボ科
キヨスミウツボ	ハマウツボ科
オオヒキヨモギ	ハマウツボ科
ムラサキミミカキグサ	タヌキモ科
ミヤマウメモドキ	モチノキ科
サワギキョウ	キキョウ科
ミツガシワ	ミツガシワ科
ワカサハマギク	キク科
イワギク (広義)	キク科
サンベサワアザミ	キク科
ヤナギタンポポ	キク科
ウスユキソウ	キク科
マルバダケブキ	キク科
メタカラコウ	キク科
オオモミジガサ	キク科
ニシノヤマタイミンガサ	キク科
カシワバハグマ	キク科
キクアザミ	キク科
キンギンボク	スイカズラ科
ウラジロウコギ	ウコギ科
準絶滅危惧 (NT) - 140 種	
ツガ	マツ科
コウホネ	スイレン科
ヒツジグサ	スイレン科
ハンゲショウ	ドクダミ科
ウマノスズクサ	ウマノスズクサ科
フタバアオイ	ウマノスズクサ科

ミヤママムシグサ	サトイモ科
ウラシマソウ	サトイモ科
ザゼンソウ	サトイモ科
エビモ	ヒルムシロ科
ヒメドコロ	ヤマノイモ科
アオヤギソウ	シュロソウ科
バイケイソウ	シュロソウ科
アマナ	ユリ科
カタクリ	ユリ科
エビネ	ラン科
ナツエビネ	ラン科
オノノヤガラ	ラン科
クロヤツシロラン	ラン科
フウラン	ラン科
ヒトツボクロ	ラン科
ショウキラン	ラン科
ヒオウギ	アヤメ科
ノハナショウブ	アヤメ科
カキツバタ	アヤメ科
アヤメ	アヤメ科
ノカンゾウ	ススキノキ科
ノシラン	キジカクシ科
ナガエミクリ	ガマ科
コウキヤガラ	カヤツリグサ科
クロカワズスゲ	カヤツリグサ科
オニスゲ	カヤツリグサ科
サンインヒエスゲ	カヤツリグサ科
サツマスゲ	カヤツリグサ科
オタルスゲ	カヤツリグサ科
オオクグ	カヤツリグサ科
ヒトモトススキ	カヤツリグサ科
ハタバカンガレイ	カヤツリグサ科
コマツカサススキ	カヤツリグサ科
ヒロハノコヌカグサ	イネ科
アイアシ	イネ科
サンカヨウ	メギ科
タンナトリカブト	キンポウゲ科
キクザキイチゲ	キンポウゲ科
アズマイチゲ	キンポウゲ科
ミヤマカラマツ	キンポウゲ科
ヤマシャクヤク	ポタン科
ヤシャビシャク	スグリ科
ミツバベンケイソウ	ベンケイソウ科
メノマンネングサ	ベンケイソウ科
オニシモツケ	バラ科
ズミ	バラ科
オオウラジロノキ	バラ科
イヌザクラ	バラ科
イワキンバイ	バラ科
ミツモトソウ	バラ科
ヤマイバラ	バラ科
ビロードイチゴ	バラ科

ミヤマニガイチゴ	バラ科
コジキイチゴ	バラ科
ヨコグラノキ	クロウメモドキ科
ケグワ	クワ科
ヤマモモ	ヤマモモ科
サワシバ	カバノキ科
ハシバミ	カバノキ科
ミヤマニガウリ	ウリ科
ウメバチソウ	ニシキギ科
クロヅル	ニシキギ科
トウダイグサ	トウダイグサ科
ツルタチツボスミレ	スミレ科
アカネスミレ	スミレ科
アケボノスミレ	スミレ科
ヒナスミレ	スミレ科
トモエソウ	オトギリソウ科
イヨフウロ	フウロソウ科
エゾミソハギ	ミソハギ科
イワアカバナ	アカバナ科
ヒメアカバナ	アカバナ科
アサノハカエデ	ムクロジ科
コクサギ	ミカン科
フユザンショウ	ミカン科
カラスノゴマ	アオイ科
カラスシキミ	ジンチョウゲ科
ユリワサビ	アブラナ科
ツクバネ	ビャクダン科
マツグミ	オオバヤドリギ科
オオハルトラノオ	タデ科
タチハコベ	ナデシコ科
オオヤマフスマ	ナデシコ科
ワチガイソウ	ナデシコ科
ウラジロウツギ	アジサイ科
バイカウツギ	アジサイ科
ハマヒサカキ	ペンタフィラクス科
リュウキュウマメガキ	カキノキ科
ギンレイカ	サクラソウ科
トクワカソウ (イワウチワ狭義)	イワウメ科
コメバツガザクラ	ツツジ科
ミヤマホツツジ	ツツジ科
サラサドウダン	ツツジ科
ウラジロハナヒリノキ	ツツジ科
シラタマノキ	ツツジ科
シャクジョウソウ	ツツジ科
ツガザクラ	ツツジ科
バйкаツツジ	ツツジ科
ホソバオオアリドオシ	アカネ科
キヌタソウ	アカネ科
ミヤマムグラ	アカネ科
サツマイナモリ	アカネ科
オオキヌタソウ	アカネ科
コカモメヅル	キョウチクトウ科

スズサイコ	キョウチクトウ科
スナビキソウ	ムラサキ科
シオジ	モクセイ科
マルバノサワトウガラシ	オオバコ科
カワヂシャ	オオバコ科
ナンゴククガイソウ	オオバコ科
ジュウニヒトエ	シソ科
ジャコウソウ	シソ科
ナミキソウ	シソ科
ナンバンギセル	ハマウツボ科
ヒキヨモギ	ハマウツボ科
イヌタヌキモ	タヌキモ科
タマミズキ	モチノキ科
ヤマホタルブクロ	キキョウ科
キキョウ	キキョウ科
チョウジギク	キク科
ハマベノギク	キク科
カセンソウ	キク科
ウスゲタマブキ	キク科
ミヤコアザミ	キク科
ハンゴンソウ	キク科
ヤマザトタンポポ	キク科
カンサイタンポポ	キク科
クシバタンポポ	キク科
カンボク	レンブクソウ科
マツムシソウ	スイカズラ科
ヨロイグサ	セリ科
エゾノヨロイグサ	セリ科
オオハナウド	セリ科
ムカゴニンジン	セリ科
情報不足 (DD) - 16 種	
ホソバテンナンショウ	サトイモ科
オオハンゲ	サトイモ科
ホソバミズヒキモ	ヒルムシロ科
マイサギソウ	ラン科
ヤマサギソウ	ラン科
チョウセンガリヤス	イネ科
ハイチゴザサ	イネ科
ケナシカシダザサ	イネ科
オニグジョウシノ	イネ科
オオバメギ	メギ科
ホザキノフサモ	アリノトウグサ科
サイコクキツネヤナギ	ヤナギ科
マルミノヤマゴボウ	ヤマゴボウ科
ヒメトラノオ	オオバコ科
ツシマママコナ	ハマウツボ科
ムラクモアザミ	キク科
その他の保護上重要な種 (OT) - 19 種	
イチイ	イチイ科
キャラボク	イチイ科
ダイセンスゲ	カヤツリグサ科
サンインシロカネソウ	キンポウゲ科

アテツマンサク	マンサク科
コゴメウツギ	バラ科
カワラハンノキ	カバノキ科
ヒョウノセンカタバミ	カタバミ科
ダイセンキスミレ	スミレ科
ダイセンオトギリ	オトギリソウ科
ダイセンミツバツツジ	ツツジ科
キシツツジ	ツツジ科
アキノハイルリソウ	ムラサキ科
サンインクワガタ	オオバコ科
ダイセンクワガタ	オオバコ科
キュウシュウコゴメグサ	ハマウツボ科
シマカンギク	キク科
キビシロタンポポ	キク科
ダイセンヒョウタンボク	スイカズラ科

V章 選定種の解説

Species Accounts

種ごとの記載項目と内容は、次のとおりである。

1. **種名**：種の和名と学名，目名と科名を表示。
2. **カテゴリー区分**：鳥取県カテゴリーおよび環境省カテゴリー（環境省最新版レッドリスト 2020でのカテゴリー。「-」は，環境省版レッドリストに掲載されていないもの）の名称と記号を記載。スペースの都合で「その他の保護上重要な種」は「その他の重要種」と略して表示されている。
3. **■選定理由**：選定の主要な理由を記載。
4. **■特徴**：種の形態的，生態的特徴などを記述。
5. **■分布**：県内と県外の分布。県外は「国内分布；国外分布」の順で記載。
6. **■保護上の留意点**：選定種の鳥取県における現在の生息状況，減少の要因等を踏まえ，その保護および生息地の保全を図るうえで留意すべきおもな事項を記載。
7. **■特記事項**：必要に応じて，天然記念物等の指定状況等，上記以外の事項を記載。
8. **■文献**：必要に応じて，県内の生息状況に関わる文献を5編以内で掲載。番号はそれぞれの分類群ごとの種の解説の後ろにまとめた文献リストの番号と対応している。
9. 執筆者名
10. **写真**：選定種の形態，生育環境が分かる写真を掲載。写真は，可能なかぎり，「レッドデータブックとっとり 2012」とは異なるもの，また，鳥取県内で撮影されたもの，を優先的に選んで使用した。

<共通の文献>

V章全体で頻出する文献については、文献名を下記のとおり省略した。

- 鳥取県のすぐれた自然（動物）＝江原昭三・鶴崎展巨（編）（1993）鳥取県のすぐれた自然（動物編）．鳥取県衛生環境部自然保護課発行（鳥取市），327 pp.
- 鳥取県のすぐれた自然（植物）＝清水寛厚（編）鳥取県のすぐれた自然（植物編）．鳥取県衛生環境部自然保護課発行（鳥取市），275 pp.
- レッドデータブックとっとり（動物）＝鶴崎展巨（編）（2002）レッドデータブックとっとり —鳥取県の絶滅のおそれのある野生動植物〈動物編〉．鳥取県生活環境部環境政策課，214 pp.
- レッドデータブックとっとり（植物）＝清水寛厚（編）（2002）レッドデータブックとっとり —鳥取県の絶滅のおそれのある野生動植物〈植物編〉．鳥取県生活環境部環境政策課，203 pp.
- レッドデータブックとっとり 改訂版＝鳥取県生物学会（編）（2012）レッドデータブックとっとり 鳥取県の絶滅のおそれのある野生動植物 改訂版．鳥取県生活環境部公園自然課発行（鳥取市），337 pp.

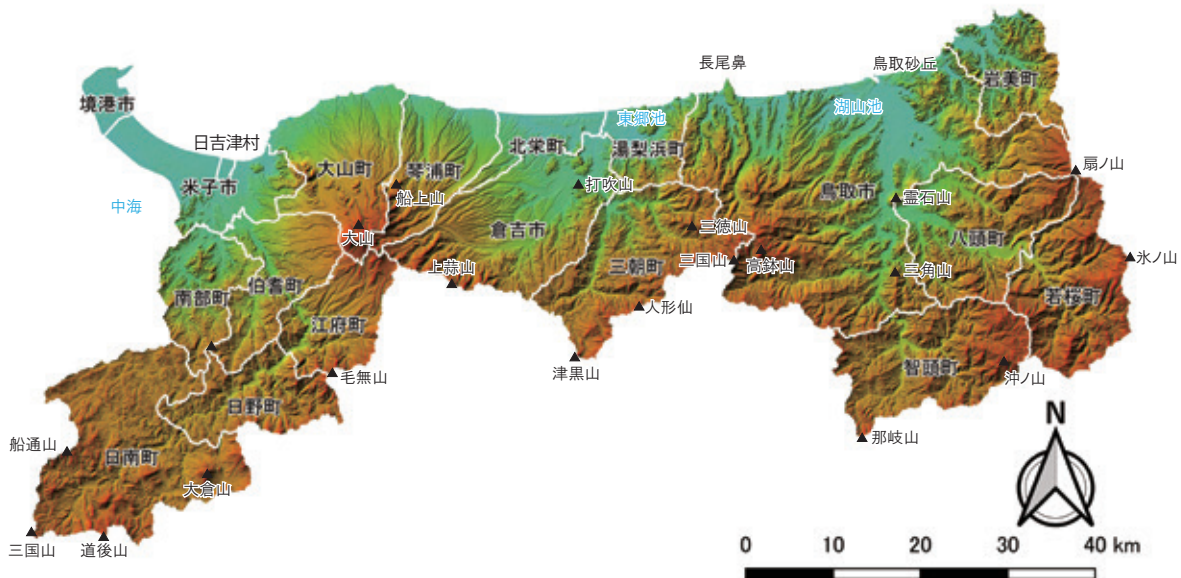


図3. 鳥取県の市町村